

論 文 の 和 文 要 旨	
論文題目	友人間の「謝罪談話」における日韓対照研究 ーディスコース・ポライトネス理論の観点からー
氏 名	鄭賢兎(ジョン ヒョンア)

本研究は、言語、性別、社会的距離、社会的力関係を条件統制した日本語母語話者男女と韓国語母語話者男女の大学生友人間の 128 会話を分析対象にし、負担度の差による「謝罪」という言語行動の類似点や相違点を明らかにした上で、相互作用における対人配慮行動のメカニズムを探ることを主な目的としたものである。ロールプレイを行った「謝罪会話」を分析対象とし、宇佐美(2006b、2008)の「総合的会話分析」のアプローチに従ってグローバルな観点とローカルな観点を取り入れ総合的に分析し、談話レベルと発話文レベルの双方の分析から考察を行った。そして Brown and Levinson(1987)の「ポライトネス理論 (Politeness theory)」と宇佐美(1998、2001、2002、2003b、2008 と Usami、2002)の「ディスコース・ポライトネス理論 (Discourse Politeness theory)」を理論的な枠組みにして「謝罪会話」における対人配慮行動を考察した。本研究は 9 章で構成され、以下では各章の概要を記す。

第 1 章では、「謝罪」という言語行動を研究対象とした背景と本研究の目的、及び構成について詳述した。

第 2 章では、謝罪、ポライトネスの研究、談話、会話研究のアプローチ、文字化システムに関する先行研究を概観し、本研究との関連性について説明した。

まず、本研究における「謝罪」の定義を行った後、発話内行為としての「謝罪」の適切性条件を述べた。その上で、日本語と韓国語、及び、日韓対照研究における「謝罪」の先行研究が概観された。従来の研究で主に謝罪する側のみに焦点が当てられたこと、一発話文レベルの分析がほとんどであること、DCT や質問紙調査法のアプローチが用いられていることなど、謝罪研究の問題点を指摘した上で、相互作用における対人配慮行動としての「謝罪」を論じるためには、本研究のアプローチが有効であることを述べた。続いて、「ポライトネスの研究」を概観した上で、「謝罪行動」に現れる対人配慮行動のメカニズムを解明するためには、Brown and Levinson の「ポライトネス理論」と宇佐美の「ディスコース・ポライトネス理論」の観点からの考察が有効であることを論じた。また、談話、テキストに関する先行研究を概観した上で、本研究で捉えている談話の概念について説明した。さらに、会話研究のアプローチを概観した上で、本研究で「総合的会話分析」(宇佐美、2008)を取り入れることの妥当性を論じた。最後に、日本語と韓国語の文字化の原則、システムについて概観した。

第3章では、「総合的会話分析」という実証的方法論に基づいた本研究の会話データの収集法、ロールプレイ場面の設定条件、負担度の差の認定方法、文字化資料の作成法、データの信頼性(「評定者間信頼性係数(Cohen's Kappa ( $\kappa$ ))」の算出)の確認方法について述べた。本研究は日韓男女母語話者を条件統制し(大学の同級生、同性の友人、負担度の軽重)データ収集を行った。また、本研究が用いた文字化システムである「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」(宇佐美、2011 改訂版)と「基本的な文字化の原則の韓国語版 (Basic Transcription System for Korean: BTKS)」(宇佐美外、2007)について詳述した。

第4章では、会話データの基本情報について詳述し、協力者の属性や会話時間、発話文数を記した。また、フォローアップ・アンケートの調査結果から、「会話の流れの自然さ」、「話し方の自然さ」、「録音の意識度」を検討し、会話データの妥当性と信頼性を確認した。さらに、文字化における発話文の改行方法、及び、各章の分析のコーディングの信頼性が「評定者間信頼性係数(Cohen's Kappa ( $\kappa$ ))」を算出した上で、確認された。

第5章では、ロールプレイを行った「謝罪会話」全体は、「謝罪行動とそれに対する反応」のやりとりを含む複数の「謝罪談話」から構成されると捉え、単位として認定する。

「謝罪談話」という単位を認定することによって「謝罪会話」における謝罪談話の種類と出現順、謝罪談話の展開の仕方、そこに現れる謝罪する側と謝罪される側の相互作用の特徴が浮き彫りになった。また、「ディスコース・ポライトネス理論」からの分析の妥当性かつ有効性を実証的に検証することができた。

まず、「負担度が軽い謝罪場面」では、日韓母語話者共に、明確な「謝罪定型表現」を含む「核談話」のやりとりだけで簡単に謝罪が受け入れられ、会話が収束する傾向があり、「挿入談話」や「後続関連談話」も多く現れた。特に、謝罪内容と直接関係のない「挿入談話」を用いて、謝罪場面和らげ、お互いのフェイスを配慮しようとする傾向が多く現れた。一方、韓国語男性は、「核談話」が現れる前に「交渉談話」のやりとりを行うという特徴を見せた。次に、「負担度が重い謝罪場面」では、日韓母語話者共に「核談話」のみならず「交渉談話」も重要な役割を果たしており、「核談話」と「交渉談話」のやりとりによって、謝罪される側が謝罪内容を受け入れるか、受け入れないかが決定される傾向が見られた。謝罪内容を受け入れる会話は、韓国語女性で16会話中14会話、日本語男性で16会話中11会話、韓国語男性で16会話中10会話、日本語女性で16会話中8会話であった。さらに、謝罪場面にも関わらず、「核談話」が現れない会話もあった(日男:1会話、日女:4会話、韓男:1会話、韓女:3会話)。「核談話」が現れず「交渉談話」のみ続く会話は、謝罪される側に謝罪内容が受け入れられないことが日本語母語話者の女性には多かったが、韓国語母語話者では、謝罪定型表現がなく、「交渉談話」のやりとりのみであっても謝罪内容が受け入れられる会話も現れていた。つまり、日本語母語話者の方が、謝罪場面で、謝罪定型表現を

含む「核談話」が現れることに対し、肯定的な反応をしていると解釈した。さらに、負担度が重い場合は、「核談話」のみならず、「前置き談話」や「交渉談話」が多く現れる傾向があるが、謝罪する側は自分のフェイスを考え、「核談話」を、負担度が軽い場合よりは、用いない傾向が、日韓に共通して現れることが明らかになった。

第6章では、日韓謝罪行動のプロセスにおける相互作用を対人コミュニケーションの観点から考察し、類似点や相違点を明らかにした。

まず、日韓類似点を負担度を比較しながらまとめる。負担度の軽い場合には、「謝罪」、「責任関連」の発話文が負担度が重い場合に比べて多く用いられていた。一方、負担度が重い場合には、「状況説明」、「対人配慮」、「問題解決」の発話文は、負担度が軽い場合より多く用いられる特徴が見られた。これらの結果から、「負担度が軽い謝罪場面」では、謝罪内容が軽くて深刻ではないため、謝罪する側は、自分のフェイスを守るより、相手の「フェイス侵害度」を軽減することを優先して、「謝罪発話文」を多用する傾向にあると解釈できた。また、謝罪される側は、相手のフェイスへの配慮を優先し、謝罪内容を受け入れていた。一方、「負担度の重い謝罪場面」では、謝罪内容が重くて深刻であるため、謝罪する側は、相手の「フェイス侵害度」を軽減したいという欲求より、自分のフェイスを守りたいという欲求のほうが優先され、明確な「謝罪発話文」が減り、代わりに、「状況説明発話文」や「対人配慮発話文」が増えていると解釈した。また、謝罪される側は、自分のフェイス保持とともに相手のフェイスを考慮するため、「問題解決発話文」を多用する傾向があると解釈した。すなわち、謝罪する事柄が重くなればなるほど、謝罪する側と謝罪される側が互いに「フェイス充足行為」を行うなどして働きかけ、「フェイス均衡」のための複雑なフェイスワークを行っているということが日韓に共通していることが分かった。

次に、「負担度が軽い謝罪場面」においては、謝罪する側は、主に「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」の発話文を用いて謝罪行動を行っていた。この点は日韓で共通しているが、韓国語母語話者は、「対人配慮発話文」や「過失修復発話文」もかなり用いるという相違点が見られた。謝罪される側は、日韓ともに「過失言及」、「事態確認」、「非難」、「譲歩」の発話文を用いていたが、韓国語母語話者では、「代償要求発話文」も多く用いる傾向があった。一方、「負担度が重い謝罪場面」においては、謝罪する側は、主に「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」、「対人配慮」の発話文を用いており、謝罪される側は、「事態確認」、「非難」、「譲歩」、「問題解決」の発話文を用いている点が共通していた。ところが、韓国語母語話者は、「過失修復発話文」も多く用いるという相違点が見られた。また、負担度が重くなることと日本語母語話者と韓国語母語話者の行動が類似しているということが明らかになった。

第7章では、謝罪談話内において謝罪する側の「謝罪定型表現」が用いられた謝罪発話文やその直後に来る謝罪される側の応答発話文を中心に、「謝罪行動」という発話行為レベルの相互作用を分析した。

まず、「負担度が軽い謝罪場面」では、日韓母語話者共に、「直接謝罪」や「責任認め」を多用し謝罪していたが、「なだめ」は韓国語女性にのみ現れていた。「肯定的な応答」は、韓国語母語話者が3割程度であるのに対し、日本語母語話者は6割程度と、韓国語話者の2倍程度用いていることがわかった。その反面、「否定的な応答」は、日本語女性に比べ、韓国語男性が5倍以上多く用いていることがわかった。

次に、「負担度が重い謝罪場面」では、日韓母語話者共に、「直接謝罪」や「責任認め」のみならず、「事態言及」や「なだめ」も用いる傾向が見られるとともに、より複雑な「謝罪発話文」が用いられていた。「肯定的な応答」を用いる割合が、日本語男性で4割程度、日本語女性ではほぼ6割程度であり、韓国語母語話者では男女とも5割程度であった。「ニュートラルな応答」は、日韓共に女性の方で多く用いられていたが、「否定的な応答」は、日韓共に男性の方で多く用いられていた。負担度が軽い場面では、相手のネガティブ・フェイスを配慮し、謝罪と責任認めを用いる傾向が多く現れていた。一方、負担度が重い場面では、相手のネガティブ・フェイスを配慮する発話のみならず、自分のフェイスも考えて事態を言及する発話や、相手のポジティブ・フェイスに訴えかける「なだめ」も用いる傾向があった。すなわち、負担が重くなると、相手のフェイスや自分のフェイスを総合的に考え、「フェイス均衡」のため、互いがより積極的に働きかけていることが明らかになった。

第8章では、5章、6章、7章の分析結果を「ディスコース・ポライトネス理論」の観点から考察した。「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」を構成する各要素の「基本状態」を同定し、そこから離脱した言語行動(有標行動)がもたらすポライトネス効果(プラス効果、ニュートラル効果、マイナス効果)を相対的に捉えることができた。その上で、言語行動を正確に捉えるためには、「相互作用」、「ダイナミクス」、「相対性」という観点から談話レベルで考察することが重要であること、また、一発話文レベルの分析では言語行動の正確な解釈には限界があるため、文レベルの要素も含めた、より長い談話レベルで諸要素を分析することが重要であるというディスコース・ポライトネス理論の主張を実証的に検証した。

第9章では、本研究の実証的結果の全体的なまとめをしてから、ポライトネス理論、及び、外国語教育への示唆を述べた。ある言語行動(発話行為)の全体像を捉えるためには、相互作用の観点が必要であること、ポライトネスの普遍理論を実証的に追及するためには、グローバルな観点とローカルな観点の双方で分析することが必要であることなどを示唆した。また、外国語教育への示唆としては、言語行動を一発話文の単純なやりとりレベルで学習させることの問題点を指摘し、発話文レベルや談話レベルの特徴を総合的に学習させることの重要性を強調した。また、当該言語文化における言語行動の「基本状態(discourse default)」と「有標行動(marked behavior)」がもたらす効果について、学習者に情報提供することが重要であることを述べた。